橿原市立図書館だより

平成27年3月10日発行
第32号

橿の樹

高取の俳人
阿波野青畝
P2～3

奈良県子ども読書活動
フォーラム
P4～5

図書館員の本棚
P6

お知らせその他
P7～8

高取の俳人

阿波野青畝

阿波野青畝に関わる図書資料については、高取町リベルテホール図書室が充実しています。希望者は閲覧が可能です。

「土佐街道」とも通称された古い町、高取。大和平野と吉野を結ぶ要衝として古代より人々の暮しが重ねられてきた地域です。長屋門や城跡など、現在も武家時代の由緒ある面影が色濃く残っています。
俳人阿波野青畝を形成したものは、豊かな自然や郷土の歴史的背景のみではありません。宿命ともいえる天性の条件や「ひと」との出会いが、青畝の作品世界を深く豊かなものにしたといえるのではないでしょうか。

虫の灯に読みたかぶりぬ耳しい兒 （大正６年 「萬兩」所収）

当時、青畝は旧制中学生でした。少年期を脱して青年期へと踏み出す季節を迎えていました。しかし、内面は穏やかではなかったはずです。幼少期より苦しめられてきた聴覚障がいの回復がすでに絶望的となり、上級校への進学も諦めざるをえない状況でした。
深夜、山家の自室にひとり引きこもり、羽虫を集めてじりじりと燃える灯火の下、ページを追うほどに昂ぶってくる高揚感……。読むことの心地よい陶酔と、そこに紙一重で存在する孤独……。難聴ではあっても、外界より伝わってくる音調が皆無だったわけではありません。それは、内なる声とも重なります。私たちとは異なる幽かな音の世界に生きた青畝にとって、夜が更けるにしたがって何層にも重なってゆく様々な声は、存在としての自己を問いかけるものであったかも知れません。

そうした閉塞の日々にあって、突破口となったのが俳句でした。通学していた八木町の書店で、偶然手に取った俳句雑誌が、その後の歩みを決めます。当時ベストセラーとして広く読まれた徳富蘆花の小説「不如帰」と見誤って手にした「ホトトギス」により、俳句表現の世界に目を開かれます。正岡子規の後継者として「ホトトギス」を主催していた高浜虚子の知遇を得たことも重なり、大正６年には、壷阪寺を詠んだ「塔見えて躑躅燃え立つ山路かな」の句作が「ホトトギス」に初入選を果たします。　＊１

正岡子規によって創始され、高浜虚子によって継承された写生主義は、青畝にも色濃く引き継がれています。もっとも、若き日の青畝にとって、それは容易に受け入れられるものではありませんでした。難聴という宿命に育まれた青畝の自己意識に深い理解を示す一方で、老練な虚子は、ロマン主義的な叙情に陥りがちな青畝を巧みに導いてゆきます。青畝もまた、客観写生の真髄と醍醐味を虚子の中に見出し、先達からの懇切な期待に応えてゆきます。山口誓子、水原秋桜子、高野素十ら他の高弟とともに、「四Ｓ」のひとりとしてやがて頭角を現します。

春の水獺の潜けば黄となんぬ　（昭和7年 「國原」所収）　＊２　＊３
鮎の宿塗は春慶づくしかな　（昭和8年　同上　）

透明感が強い水中に黄金に広がる残映……。匂い立つような鮎の碧（あお）さと漆の硬質な光沢……。解説書や専門家の評価とは別に、読者自身にとっての鮮やかな一句に出会うことが、句集を読む楽しさなのかも知れません。

阿波野青畝（あわの　せいほ）　　略年譜

1899（明治32）年	2月2日、奈良県高市郡高取町大字上子島に、橋本長治、かねの五男として生まれる。本名は敏雄。
1905（明治38）年	高取町内の土佐小学校入学。耳の疾患（重度の聴覚障がい）があらわれる。医療による治癒がかなわなかった。
1913（大正2）年	旧制畝傍中学（現畝傍高校）入学。八木町までの片道約9キロを徒歩通学する。
1915（大正4）年	俳句雑誌「ホトトギス」を知る。同誌系の有力俳人で郡山中学教師、原田濱人に師事。
1917（大正6）年	「ホトトギス」の流れをくむ有力俳人であった野田別天楼が畝傍中学に赴任し、青畝を担任する。10月、高浜虚子が来県、知遇を得る。「ホトトギス」に「塔見えて……」の句作が初入選。
1918（大正7）年	中学卒業後、八木銀行（現南都銀行）に入行。
1919（大正8）年	それまでの客観写生への疑念を払拭し、虚子の指導のもと句作に専心する。
1923（大正12）年	八木銀行退職。阿波野貞と結婚、改姓。大阪市西区京町堀上通に転居。
1929（昭和4）年	1月、八木町（現橿原市内）にて「かつらぎ」を創刊。以降「かつらぎ」は青畝の活動拠点誌となる。
1931（昭和6）年	4月、第一句集「萬兩」（青畝句集刊行会）を刊行。
1942（昭和17）年	10月、第二句集「國原」（天理時報社）刊行。統制令により「かつらぎ」は「飛鳥」に統合。
1946（昭和21）年	3月、「かつらぎ」を再開。2年後の23年、株式会社「かつらぎ社」を創立。
1952（昭和27）年	12月、第三句集「春の鳶」（書林新甲鳥）を刊行。
1973（昭和48）年	6月、第7回蛇笏賞。前年、第五句集「甲子園」（角川書店）を刊行。
1975（昭和50）年	3月、俳論集「俳句のこころ」（角川書店）を刊行。11 月瑞宝章。

橿原市立図書館が所蔵する阿波野青畝関連の図書

阿波野青畝全句集	阿波野青畝　著　稲畑汀子　監修	花神社
阿波野青畝句集	阿波野青畝　著	白鳳社
富安風生　阿波野青畝集		朝日新聞社
ホトトギス名作文学集	紅野敏郎　編集	小学館

館内展示のお知らせ

5月22日（金）～7月15日（水）まで館内2F展示コーナーにて「高取の俳人　阿波野青畝」を行います。

＊1　「躑躅」（つつじ）
＊2　「獺」　（せん）カワウソ
＊3　「潜く」　（かづく）または（かつく）

奈良県子ども読書活動フォーラム

実施日　平成27年3月6日（金）
会　場　かしはら万葉ホール
主　催　奈良県
後　援　橿原市教育委員会

子どもたちの読書活動を推し進める啓発として毎年実施されているフォーラムが、今年は橿原市で実施されました。橿原市子ども読書活動推進会議の取組について、奈良教育大学教職大学院教授、松川利広先生のご助言を頂きながら、橿原市立図書館、橿原市立小学校、橿原市内の読書関連の各団体による事例発表、グループワークが行われました。このページは、フォーラム当日の概要発表を基に、図書館担当者が再構成したものです。

「橿原市子ども読書活動推進計画」の策定については、国の法整備や奈良県計画の策定に準じる形で整えられました。平成13年に「読書活動推進に関する法律」が制定され、平成15年には「奈良県基本計画」が策定されました。橿原市においても、平成20年2月に「橿原市子ども読書活動推進計画」を策定し、20年4月より具体的な取組を始めました。計画策定の作業が平成19年度当初から始まりましたので、この取組も今年で8年目に入ります。

子どもたちの読書活動を推し進める取組は、図書館単独では不可能で、橿原市の場合も様々な方々のご尽力で成立させています。

橿原市では、計画策定だけではなく、4部会から成る「橿原市子ども読書活動推進計画推進会議」を編成しています。推進会議と4つの部会については、橿原市の子ども読書活動推進の取組主体となる組織です。各部会の編成は以下のとおりです。

「地域部会」　社会教育課　中央公民館　橿原文庫連絡会　橿原おはなしの会　図書館

「家庭部会」　福祉総務課　子育て支援課　健康増進課　橿原文庫連絡会　橿原市図書館ボランティアの会　図書館

「学校部会」　教委総務課　学校教育課　市立学校校長会　学校図書館研究会　橿原文庫連絡会　橿原おはなしの会　橿原学校図書館ボランティア連絡会　図書館

「図書館部会」　橿原文庫連絡会　橿原おはなしの会　橿原市図書館ボランティアの会　図書館

子どもたちの読書活動の推進については、子どもたちと本とをつなぐ「おとな」の介在が大きな役割を果たします。そうした「おとな」の役割を、図書館関係者や行政関係者、教育関係者だけでなく、計画策定以前から活動を継続してこられた団体や、ボランティアの方々と共に果たしてゆきたいという方向性が、計画の骨子となりました。

橿原市にとって幸運であったのは、ゼロからのスタートではなかった点です。橿原市立図書館が開設されたのは平成8年8月、橿原市子ども読書活動推進計画の策定が平成20年2月でしたが、それ以前から、様々な団体やグループ、教育関係者や図書館関係者による取組が市内に存在していました。そうした地道で草の根的な土壌の上に、橿原市の計画策定が芽吹いたということもできるのではと捉えています。

図書館が開館する以前、市立図書館不在の状況を補ったもののひとつが地域文庫の活動でした。児童文学作家の石井桃子さんや松岡享子さんらによる地域文庫の活動が、全国の多数の読書愛好者や団体によって実践されてきた背景があります。公民館や集会所、あるいは家庭の居間や書斎を開放して担われる私設の図書室ともいえる取組です。橿原市においても、昭和40年代後半から、中央公民館図書室の所蔵図書を公民館の職員によって各文庫

に巡回させる「橿原市移動文庫」が民間と行政の連携として始められました。子どもたちの身近な場所にある文庫は、子どもと本をつなぐ地域の拠点として役割を果たしてきたことから、子ども読書活動の先駆的な存在として捉えることができるのでは、と思います。橿原おはなしの会は、橿原市立図書館が主催するストーリーテラー養成講座の修了者によって平成12年9月に結成されました。図書館おはなし室での活動や幼稚園等へのおはなし配達の活動、また近年は図書館主宰のストーリーテリング講習会講師などに尽力いただいています。

現在は奈良県立図書情報館に統合された奈良県立橿原図書館の児童サービス、あるいは、橿原市立の中学校小学校の教育関係者によって構成される学校図書館研究会などが、それぞれの職域や担当分野に応じた取組を重ねてきました。

計画策定以前からの取組や団体の連携とともに、もうひとつ重要なことがあります。それは、計画策定の動きのなかで、新しく団体やグループが生まれたことでした。子どもたちの育ちにおける本や読書の大切さについては、多くの方々がそれぞれの職域や立場から繰り返し認識されてきたことですが、子どもたちの読書活動を推し進めるための取組のために、立場や役割の違いを越えて連携するといった発想は、比較的新しいものだと捉えることができるかもしれません。そうした新しい発想とともに、計画に参画いただいた新規団体やグループが存在します。平成19年に結成された橿原市学校図書館ボランティアの会や橿原学校図書館ボランティア連絡会、ブックトークの会バードなどが、そうした団体に当たります。

立場や分野の違いを越えて連携に努めてゆく中で、何が大切かということにも関心が払われるようになりました。1点目は、「連携先の発見や開拓」という点です。図書館や行政単独では実施が不可能な取組も、連携により可能となることがあります。そうした連携先が身近に存在しないかどうか、確かめてみる必要があるのではないでしょうか。先ほどのブックスタートの場合も、事業開始の初期段階では、橿原文庫連絡会等の民間のノウハウや人脈が活かされました。地元の読書や子育て関係者の中に、「橿原市でもブックスタートを実施してほしい」という要望があって、計画策定の流れの中で実現されました。行政内にブックスタートについての知見や情報が乏しい状況で、図書館や行政単独での事業実施は難しかったのではと捉えています。平成20年度当時、県内で、ブックスタートを実施していたのは1、2の自治体に限られていましたが、その後多くの自治体に取り入れられました。橿原市の場合、図書調達の予算は健康増進課、調達事務は図書館、現場を担う人材は、図書館ボランティア・子育て支援課、健康増進課、図書館が担っています。計画策定に先行した取組や団体に助けられた面が大きかったのは、冒頭にお話した通りです。

2点目は「地域や自治体の実情に応じた取組」を行うという点です。橿原市立図書館の団体貸出が好実績なのは、初期の恵まれた環境に助けられた面が大きかったと言えます。「専用閉架3万冊」「学校関係者による団体貸出利用等との連携」が、計画策定以前から先行してありました。学校図書館の環境整備が充分でないことの補完する意味合いから、図書配送を図書館で補うことを含めて取り組みを続けてきました。

取組方法を改めて見直すことで、不可能と思われた取組も可能となる場合があります。橿原市のブックスタート事業は、4～6ヶ月児を持つお母さんに向けての啓発という意味合いから少し離れて、1歳6ヶ月児自身への読み聞かせという側面も併せ持っています。ブックスタート本来のスタイルで、しかも図書館単独で実施することが難しかったため、健康増進課の1才6ヶ月児健診と連携することで実現を図ったという背景があります。

いきなり難度の高いことに取り組むのではなく、関係者の理解や協力を醸成しながら身の丈にあった取組を地道に重ねてゆくことも大切では、と捉えています。

3点目は「連携する相手への敬意と配慮」という点です。ケースバイケースで、取組の選択に「幅」を持たせることも必要ではと捉えています。橿原市の場合、図書館員の学校派遣は行っていません。図書館見学などで子どもたちに来館してもらった時、本と図書館に関する話を取り入れるように努めています。団体貸出は不参加の学校も、「こんな本読んでんねん」や「図書館見学」など他のメニューには参加していただいている場合もあります。それぞれの団体や職域の方々に主体的に取り組んでいただくことを大切にしています。

子どもが素晴らしい本と出合うために、取組に関わるおとなが問題意識を共有することを、今後も大切にしてゆきたいと捉えています。

奈良県子ども読書活動フォーラムについては、奈良県（青少年・生涯学習課）のホームページを参照願います。

図書館員の本棚（18）

「くっすん大黒」　町田　康　　著　　文藝春秋

町田　康（まちだ　こう）
1962 年大阪府堺市生まれ。高校在学中に「町田町蔵」の名で歌手活動を開始。1996 年、「くっすん大黒」で小説家デビュー。2000 年に「きれぎれ」で第 123 回芥川賞受賞。

……もう三日も飲んでいないのであって、実になんというかやれんよ。ホント。酒を飲ましやがらぬのだもの。ホイスキーやら焼酎やらでいいのだが。あきまへんの？　あきまへんの？　ほんまに？　一杯だけ。あきまへんの？　ええわい。飲ましていらんわい。飲ますな。飲ますなよ。そのかわり、ええか、おれは一生、Wヤングのギャグを言い続けてやる。……

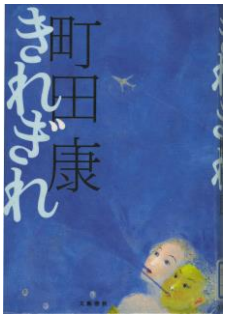
こんな罵詈雑言を重ねる楠木正行は、「三年前、ふと仕事をするのが嫌になって仕事を辞め、酒を飲んでぶらぶらしていたら妻が出て行った」という自堕落な男。売れない役者や冴えない歌手で食いつないでいる。こうした主人公の造形には、高校在学中にバンドを結成してパンクロッカーとしてメジャーデビューするも、わずか3ヶ月で解散してしまった町田自身の試行錯誤と悪戦苦闘の日々が投影されているのだろう。

タイトルにもなっている「くっすん大黒」は、高さ五寸ばかりの金属製の大黒。バランスが悪く自ら立つことすらできない。立てておいても、すぐに倒れてしまう。楠木は、自分のことは棚に上げて、「大黒様みたいな顔になってしまった」と自己嫌悪に陥る。そんな楠木を揶揄するように、にやにや笑いを浮かべる大黒に、さらに腹を立てる。何度も捨てようとするが、その度に挫折する。ゴミに出そうとしても屁理屈が邪魔してままならず、不法投棄しようとすれば警察官に職務質問され、腐れ縁が切れない。誰かに見つかって馬鹿にされるのは嫌で、かといって、こっそり捨てようとしてもうまくいかない。駄目な自分をどうにかしたいが、その駄目さを人前にさらすこともできず、逃げるたびにうまくいかない自己呪縛のようなままならなさを、何とも言い難い絶妙の空気感で表現している。

因業のような大黒を、楠木は菊池に押し付けようと思いつく。ところが、まるで大黒の「祟り」であるかのように、逆に友人のトラブルに巻き込まれてゆく。ドタバタ劇のような展開に、自堕落でいい加減なはずのふたりが逆にまともに見えてくるような、一層ハチャメチャな他の登場人物に振り回される様は、まさに抱腹絶倒。彼らが陥る状況は、客観的にはどうしようもない救いのないものだが、「突き抜けた感」が湿った暗さを感じさせない。

作品からは、駄目さや屁理屈や屈託といったものをそのまま受容しているような「無責任さ」と「奥行き」が感じられもするだろう。しかし、小説を記すことは、自己の甘さの中に退行することではない。この作品に出会った学生時には、ユーモアと皮肉の効いたリズミカルな文章を楽しんでいるだけだった。だが、社会に出た後、駄目さも屁理屈も自堕落も容赦なく断罪される場所に身を置いてから改めて読み返してみると、著者は、自身の中にある駄目さや屁理屈や自堕落から目をそむけずに直視して、作品に刻むことで決別したのだと気が付いた。

「くっすん大黒」
町田　康　著　文藝春秋



「きれぎれ」
町田　康　著　文藝春秋

4月23日は子ども読書の日

子ども読書の日にちなみ、①～④の催事をおこないます。

①「赤ちゃんが『絵本』とであったら」

日　　時　4月18日（土）午前10時30分
講　　師　西村　洋子さん（橿原市図書館ボランティアの会）
場　　所　かしはら万葉ホール4F視聴覚室
申込など　広報かしはら4月号に掲載します。

②「子どもの育ちと本　～心を育む絵本とわらべうた～」

日　　時　4月26日（日）午前10時30分
講　　師　橿原文庫連絡会
場　　所　かしはら万葉ホール4F視聴覚室
申込など　広報かしはら4月号に掲載します。

③「きて　みて　おはなし会」

日　　時　4月25日（土）午後2時～
講　　師　橿原おはなしの会
場　　所　図書館おはなし室
申込など　広報かしはら4月号に掲載します。

④「ぬいぐるみ限定　としょかんおとまりプラン」

夜、ぬいぐるみたちは図書館でどんな過ごし方をするのでしょう。おはなし会の後、持参のぬいぐるみが図書館にお泊りします。翌日、図書館に迎えにきてくださいね。（宿泊できるのはぬいぐるみだけです）

対象　ぬいぐるみを預けられる3歳～小学校低学年の方と、ぬいぐるみ1体

日時　4月18日（土）午後4時～

詳細は広報「かしはら」4月号に掲載します。

図書館利用カードの更新手続について

◆　手続に必要なもの
①　図書館利用カード
②　現住所を確認できるもの
（運転免許証や健康保険証）
※　県外の方は、在勤・在学を証明できるものも併せて持参願います。

詳細は、来館時にカードをご提示の上、おたずねください。

図書展示「こころのケア」

健康増進課との連携図書展示です。
期　　間　3月31日（火）まで
場　　所　館内1F展示コーナー

図書館ボランティアを募集しています

館内での読み聞かせ、汚破損図書の修理、ブックスタート会場での来場者対応などにご参加いただける方を随時募集しています。詳細は、図書館へ直接お問合せください。

◆　おはなし班
図書館おはなし室、図書館行事などで、子どもたちに絵本の読み聞かせ、紙芝居の実演など。

◆　ブックスタート班
1歳6ヶ月健診会場で、受診者の幼児とその保護者に絵本の読み聞かせや各種のお知らせ紹介など。

◆　修理班
館内の作業室で、所蔵図書の清拭や修理など。

橿原市立図書館

橿原市小房町１１－５

TEL:
0744-29-2121

FAX:
0744-29-1011

http：
//www.city.kashihara.jp/
toshokan

編　集　後　紀

ヒョウタンとナマズ

京都の妙心寺は、禅宗の古刹として名高い。塔頭の退蔵院に、室町期から伝わる国宝がある。如拙作の名画「瓢鮎図」である。ヒョウタンを携えた農夫が、わがもの顔で泳ぎ回る大ナマズを捕らえようと身構えている。だが手にしているのは、丈夫な魚網ではなくヒョウタン。禅問答ではないが、様々な絵解きができる画だ。▼画そのものも素晴らしいが、画に誘発された著述家が何人も取り上げている。「日本のルネッサンス人」を記した花田清輝の「ナマズ考」もそのひとつである。「新様」と称されたこの画の本当の素晴らしさは、作画技術の新しさにあるのではなく、主題の新しさだと花田は推論する。天変地異や動乱が重なった当時、各地に勃興しつつあった土民の叛乱に触れている。そうした新しい時代精神の息吹を寓意的に捉えたのがこの画であると。▼農夫の姿には、何が仮託されているのか。権勢への愚かな異議申し立てか。あるいは、追い詰められた者のやむにやまれぬ必死さか……。だがどちらにしろ、彼の手にあるのは、物々しい武具などではなく、ヒョウタンでしかない。この画が、鑑賞者にとって時に鏡の中を見るように思えてくるのは、そこに一個のカリカチュアを、一枚のポートレートを、発見できるからではないだろうか。

（編者）

こんな本読んでんねん

市内小学生による平成26年度の応募書評365作品から、6作品を紹介します。

6年生　森　由璃亜　さん 「レ　ミゼラブル」 岩波文庫
「レ　ミゼラブルの本を初めて読みました。様々な人々がおおぜい登場するため、しっかり読んでいないと混乱してしまいました。ジャン・バルジャンを通じて、ユーゴーが伝えたいことが「世に中には、良いことと悪いことがある」ということがわかりました。」

なるほど！　古典は、人々に長く読みつがれてきた証（あかし）。粒ぞろいの宝庫です。それにしても、少年少女向けの簡易版ではなく、岩波文庫版で読み通したとは！　すごい。

5年生　七井　知羽　さん 「悪夢ちゃん」 角川書店
「5年2組担任の武戸井あや未は、表は超美人の人気者。うらでは超冷徹な腹黒仮面教師！　これからも「いい人」を演じ続ける予定だったが、「先生、助けて」 悲さんな未来を予知するゆい子と出会い、未来の悲げきを防ぐ救世主役にされてしまった！」

なるほど！　この本のおもしろさは、単なる「つくり話」ではなく、現実の一面を描いているからではないでしょうか。おとなもまた、仕事を通じて成長するのかも……。

6年生　吉井　実夢　さん「パンパイヤ・ガールズ　あの子は吸血鬼？」理論社
「私はあまり本を読みませんが、友達が読んでいておもしろそうだったので読んでみました。オルビアとアイビーが入れ替わってしまう物語です。入れ替わってもなかなかバレないで、ドキドキするおもしろいストーリーです。」

なるほど！　「入れ替わり」や「取り代え」は、物語によく取り入れられる骨組ですね。読書好きではなくても、友達がいったいどんな本を読んでいるか、すごく興味がありますよね。

6年生　横谷　若菜　さん 「しっぽをなくしたイルカ」 講談社
「原因不明の病気で尾びれの4分の3を失った、がんこで子育て上手なおかあさんイルカのフジ。「人工尾びれを作って、フジの泳ぎを取りもどそう！」 とみんなで協力する話です。読んでみると、自分も助けてあげたいなぁ、と思ったりする物語です。」

なるほど！　昨年もおととしも、この本の紹介者が続出しました。残念なことに、フジは命を終えたと報道されましたが、この物語に接した人々に、様々なことを伝えました。

6年生　西川　ロコ　さん 「黒魔女さんが通る」 講談社
「オカルト好きのチョコこと千代子は、キューピットを呼ぼうとして、間違え、黒魔女のギューピットを呼び出してしまい、黒魔女さん修行をさせられるという話です。キャラクター全員が、個性的でとてもおもしろいです。」

なるほど！　ギューピットとは、いかにも黒々としたひびきで「感じ」が出ていますね。物語で作者が苦心するのは、登場人物のキャラクターづくりだそうです。

4年生　まつ村しゅうか　さん 「わすれんぼうのねこ　モグ」 あすなろ書房
「モグはあさからついていませんでした。いいきもちでねむっていると、いきなりニッキーにぎゅっとだきしめられたのです。ニッキーはほっぺをすりすりして「モグ、だーいすき！」 むりにおこされたモグはごきげんななめ。ふたりはなかよしで、すごくいいなぁと思いました。」

なるほど！　ふたりの親密さがよく分かる紹介文です。だきしめて強引に目覚めさせるのも、大の仲よしだからこそ。ふたりのやりとりが知りたくて、先を読んでみたくなります。

表紙の写真

高取川の最上流域、高台の一角に今も現存する阿波野青畝の生家。生家前の谷筋を下ると、直ぐに視界が開けて金剛葛城の連山を望むことができます。

葛城の山懐に寝釈迦かな　　青畝　　（昭和3年 「萬両」所収）